

# 正直者の書評



小谷野 敦  
二やのどん 比較文学者

## 嘘の訂正はなかなか難しい

私  
信じられている嘘を訂正するのは

触れている、ジェンダーは文化的に決定されるといふ説の嘘については、これを唱えたジョン・マナーの実験が失敗していたことが、ジョン・コラピント『ブレンダと呼ばれる少年』（扶桑社）に詳しく、小倉千加子の『セックス神話解体新書』（ちくま文庫）など、このマナー説と狼少年と両方を使って論じられているが、未だに訂正もされずに売られている。著者も言うとおり、いったん広まった嘘が訂正されるのは

を学生に読ませたりしてきたが、たとえばデイヴィッド・トレイル『シユリーマン―黄金と偽りのトロイ』（青木書店）は、トロイ発掘のシユリーマンがぺてん師まがいの人物で、四十五歳になるまでトロイの遺跡に関心を持ったことなどなく、自伝『古代への情熱』は嘘だらけだとしており、これは定説である。岩波、新潮文庫など、この自伝を今でも平然と若者に勧めたりしている。あとは吉田守男『日本の古都はなぜ空襲を免れたか』（朝日文庫）は、京都に空襲がなかったのが、親日家のウォーナー博士が、文化遺産を守るためルーズヴェルトに進言したからだというのは嘘で、京都が原爆投下予定地だったため、その効果を見るために空襲しなかったただけだと明らかにしている。

## 鈴

木光太郎 『オオカミ少女はいなかった』は、既に世評高く、版を重ねている。表題の、アマラとカマラと呼ばれる狼に育てられた少女たちというのはどうやら嘘で、精神発達に遅れのある少女らが親に棄てられただけではないかという最近の定説や、サブリミナル効果というのがでっち上げであること、またエスキモーには雪を表す百いくつの言葉があるといった都市伝説と、その原拠であるサピアーウオーフの、強い言語相対主義など、かつて信じられて今では棄てられた学説を八点扱っている。とはいえ、広く信じられていたのはこの三つくらいである。サブリミナルなど「刑事コロンプ」でも使われていたが、著者も少し

触れている、ジェンダーは文化的に決定されるといふ説の嘘については、これを唱えたジョン・マナーの実験が失敗していたことが、ジョン・コラピント『ブレンダと呼ばれる少年』（扶桑社）に詳しく、小倉千加子の『セックス神話解体新書』（ちくま文庫）など、このマナー説と狼少年と両方を使って論じられているが、未だに訂正もされずに売られている。著者も言うとおり、いったん広まった嘘が訂正されるのは



「オオカミ少女はいなかった」  
鈴木光太郎  
新曜社  
2730円